石川看護研究会　Journal of Ishikawa Society of Nursing Research, Vol.15, No.1, pp.41～44, 2002.

実践報告

精神症状を伴う重度知的障害者の変化
－問題行動と気分転換の関連性を探る－

岡田　まり・山越　愛子・村上　文江
最上　やす子・大釜　幸子
石川県立高松病院

Possibility of the change of the severe mental retardation with mental symptoms : Research into the relationship between problem behaviors and pastimes

Mari Okada, Aiko Yamakosi, Fumie Murakami
Yasuko Mogami and Ohkama Sachiko
Ishikawa Prefectural Takamatsu Hospital

キーワード
気分転換活動，重度知的障害，問題行動

はじめに

重度知的障害者は自ら気分転換を出来ないことが多い。そのためストレスに対し自己をコントロールできず，自傷・他害・奇声等の問題行動が頻発し，集団行動が困難な現状がある。

重度知的障害者に気分転換活動（以下活動）を試みることで，問題行動が減少することを予測し，研究に取り組んだ。そこで，この活動に関する先行研究について調べたが，文献はみられなかった。当院の精神症状を伴う重度知的障害の病棟では，以前から集団音楽療法や個人の好みの音楽を聞かせていたが，患者が孤立していることが多くみられた。

今回，音楽療法以外の集団活動を取り入れることで，問題行動の出現回数や活動に対する社会性・反応性を調査した結果，一部に変化がみられたので，その経過を報告する。

用語の定義

1．気分転換活動：患者の気分転換を目的とした，「音楽鑑賞」「散歩」「絵画」「売店への買い物」「アロマセラピー」の５項目のレクリエーション活動。

2．問題行動：他患者への暴力，自傷，奇声，異食，放尿・放便，衣類の着脱を繰り返す行為。

3．重度知的障害：国際疾病分類：ＩＣＤ10・Ｆ７の対象者とする。（要求あるいは指示を理解したり，それに応じたりする能力がきわめて限られている者。自分自身の基本的ニーズを満たす能力はほとんどなく，常に援助を必要とする者。）

4．気分転換活動評価表：気分転換活動を実施するにあたり，社会性・反応性を１～５点の得点評価する表で，得点が高いほど反応性・社会性が高い（音楽療法評価スケール改定表：集団的活動・評価・観察内容に共通する）。

表１　気分転換活動実施表

実施期間：H12年８～９月　月～金曜日（10時～11時）

週課予定：

月	火	水	木	金
音楽	散歩	絵画	売店	アロマ

方　　法：＜音　楽＞デイルームにＣＤを流す。
・海からのおくりもの　　・空からのおくりもの
・大地からのおくりもの
＜散　歩＞晴れ：病院周辺
雨　：運動療法棟でボール遊びなど
＜絵　画＞デイルームにてくれよんを使い、画用紙に自由に絵を書いてもらう。
＜売　店＞喫茶のソファに座り、お菓子をみんなで分けて食べる。
＜アロマ＞テレビ横にアロマポットを置き、ラベンダー精油を５滴使用する。

表２　気分転換活動評価表（点）

評価項目＼点数	1	2	3	4	5
社　会　性	無関心	個別的な働き掛けがあった時のみ、その人と交流がもてる。	個別的な働き掛けがあった時、周囲と交流が持てる。	個別的な働き掛けがなくても、周囲と交流がもてる。	集団内で積極的な行動がとれる。
反　応　性	拒否的	拒否的ではないが楽しんでいない。	時々、受身的に楽しんでいる。	受身的だが常時楽しんでいる。	積極的に楽しんでいる。

研究方法

１．期間：2000年７月～９月

２．対象：入院中の重度知的障害者15名中（重症度：入院の患者８名はＩＱ34以下の重度，７名はＩＱ20以下の最重度知的障害者）男性11名・女性４名，平均年齢45.7±17.0（19～59歳），平均入院期間12.0±16.5年（２～34年）。

３．介入方法

１）気分転換活動実施表（表１）をもとに，毎週，月～金曜日の午前10～11時に音楽鑑賞・散歩・絵画・売店への買い物・アロマセラピーを集団で実施した。

２）問題行動に対しては，独自のチェック表（問題行動の出現内容・時間・アセスメント）を用い，上記対象者の個別の問題行動出現回数を７～９月の３ケ月間の24時間，看護師７名が三交替で観察した。

４．評価方法

１）気分転換活動は，８～９月の２ケ月間の活動実施後に上記対象者を気分転換活動評価表（音楽療法評価スケール改定表：集団的活動・評価・観察内容に共通する）の５段階（表２：得点が高いほど反応性・社会性が高い。）を用い，反応性と社会性は看護師が評価し，１ケ月毎の平均得点（合計得点／参加日数）を求めた。

２）問題行動には，７～９月の３ケ月間に問題行動回数を看護師が観察し，１ケ月毎に問題行動の延数を対象患者数15人で割り，平均回数（合計回数／観察日数）を求めた。

３）倫理的配慮は，家族には通信や面会を通し，活動により状態変化する可能性がある利点・欠点や強制しないことの説明をし，承諾を得た。患者には本人の意思で参加してもらった。また発表にあたり，プライバシーの保護を約束した。

表３　問題行動回数と気分転換活動（反応性・社会性）の得点の変化

	問題行動（回）	社会性（点）	反応性（点）
活動前１ケ月間（ＳＤ）	31.07　(17.16)	—	—
活　動１ケ月目（ＳＤ）	22.53*（17.07）	2.19	1.83
活　動２ケ月目（ＳＤ）	26.73　(19.27)	2.29	1.92

＊Ｐ＜0.01

表４　気分転換活動の問題行動の平均回数と社会性・反応性の平均得点

活動項目	音楽	散歩	絵画	売店	アロマ
問題行動：活動前１ケ月間（回）	5.4	4.5	3.8	3.9	3.5
活　動１ケ月目（回）	3.1	3.7	3.1	2.7	3.9
活　動２ケ月目（回）	4.4	4.7	3.7	2.9	4.2
社 会 性：活　動１ケ月目（点）	2.1	2.5	2.1	2.1	1.8
活　動２ケ月目（点）	2.2	2.4	2.3	2.5	1.9
反 応 性：活　動１ケ月目（点）	2.0	2.1	2.2	2.2	1.7
活　動２ケ月目（点）	2.1	2.3	2.3	2.3	2.1

５．分析方法

１）問題行動出現回数は活動前１ケ月間と，活動開始１ケ月目・２ケ月目それぞれに有意差があるかをｔ検定で分析する。

２）気分転換活動の社会性・反応性は活動開始１ケ月目・２ケ月目で有意差があるかをｔ検定で分析した。

３）事例を通して問題行動と気分転換活動の関連を質的にアセスメントした。

結　果

１．問題行動出現回数は活動前１ケ月間と活動１ケ月目にのみ，有意差が認められた（Ｐ＜0.01）（表３）。

２．気分転換活動開始１ケ月目と２ケ月目では，社会性・反応性に有意差は認められなかった。活動内容では売店の社会性・アロマの反応性の平均得点にわずかな上昇があった（表４）。

３．事例を通して問題行動と気分転換活動の関連を質的にアセスメントすると活動中に点数化できない個人の問題行動の変化がみられた。

事例１　28歳　男性　最重度知的障害（ＩＱ：測定不可能），てんかん

集団活動の５項目に関しては，売店・散歩などの病棟外での活動は参加できない。

発語は殆どなく奇声のみである。自傷・他害により夜間は個室使用。活動中は静かに参加。絵画は描きなぐっていたが，人の顔を描き集中できるようになった（図１）。

事例２　49歳　男性　最重度知的障害（ＩＱ：測定不可能）

集団活動の５項目に関しては，全項目参加可能。

発語は時々あるが不明瞭。自傷・奇声・ドア叩きなどがみられたが，活動中は他患者と一緒に静かに過ごすことができ，ドア叩きがなくなった。

考　察

ヘンダーソン[1]は，人間の基本的欲求の中に「遊びや，様々なレクリエーションの参加」を挙げている。吉田ら[2]は，「人間にとって『レクリエーション』とは，その生活の中で非常に重要な役割をもっている。多くの社会人はそれぞれに趣味や楽しみをもっており，気分転換や内面的豊かさの向上を図っているといえる。」と述べている。今回，気分転換活動前と活動開始１ケ月目で問題行動に減少が見られた。重度知的障害者は自分から欲求を満たす場を作り出すことが困難であるが，その場を提供出来た事で問題行動が減少したと考える。問題行動の出現回数の経過では，活動１ケ月目で一旦減ったものが，活動２ケ月目で増加していることから，経過が長いと気分転換にはならない事が推測される。個々の注意の引き出しや導き，大切な刺激を強調させることが不足していた結果であろうと思われる。

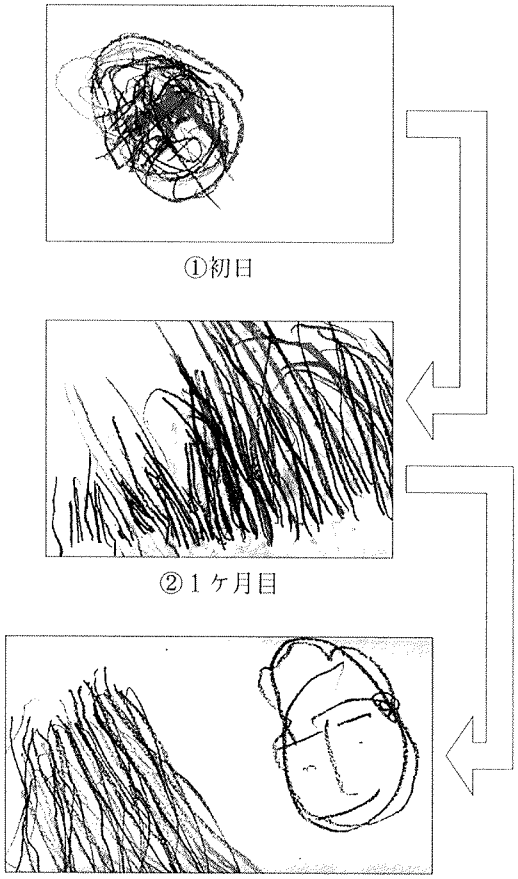

図1　事例1：絵画の変化

反応性・社会性では有意差がなかったが，活動内容で売店の社会性とアロマの反応性にわずかな変化がみられた。このわずかな変化も重度知的障害者の能力を考えると軽視できないと考える。問題行動と気分転換活動5項目の反応性・社会性の関係をみると，「売店」は問題行動が減少し，社会性が上がる。「アロマセラピー」は問題行動が増加するが，反応性が上がる。「音楽」は社会性も反応性も変わらないが，問題行動が減る。などのわずかな数値の変化ではあるが，問題行動を減少させるには，「売店」「音楽」が効果的であり，反応性を上げるには，「アロマセラピー」が効果的で，社会性を上げるには「売店」が効果的な傾向があることがわかったが気分転換活動ひとつひとつの種類により持ち方の工夫が必要だと考える。上記のことは，15名の少人数のデーターではあるが，介入の考慮の一つに入れれば，次の視点の拡大に繋がると思われる。

また，事例では絵画が個人的に評価尺度にはない変化を遂げた。絵画での上達や散歩・売店の促しにうれしそうに参加する姿が見られた。また音楽やアロマセラピーを行うと静かに過ごすことが多く見られ，絵画では普段は孤立していることが多く見られた患者が，隣り合って座り絵を描くところをのぞき込む場面が見られた。その一方で活動の促しを拒絶したり，プログラムによって参加できない患者もいた。活動期間が2ケ月間と短く，充分指導が行かず，活動の意味を理解できないため社会性・反応性の変化には繋がらなかったのではないかと思われる。

今回，活動のプログラムを5項目に限定したことや実施期間が短く研究の限界があった。また，集団性を強く進めると個性が埋もれてしまうため，集団活動と個別活動とをどのようにうまく結びつけて発展させるかが課題である。今後，個々のニーズの変化を把握した上でのプログラム修正が必要であり，検討し継続していきたいと思う。

ま と め

精神症状を伴う重度知的障害者15名に気分転換活動である「音楽」「散歩」「売店」「アロマセラピー」を月曜日から金曜日の5日にそれぞれ1活動を取り入れ，問題行動，社会性・反応性の変化を1ケ月目と2ケ月目に評価した。その結果以下の結論を得た。

1．問題行動は，気分転換活動後に減少し，活動2ケ月目ではすべての活動においては1ケ月目より増加した。特に気分転換活動である「音楽」，「散歩」，「売店」の減少が大きかった。

2．社会性と反応性は，気分転換活動である「売店」の社会性，「アロマセラピー」の反応性が他の活動より，上昇の幅が若干大きかった。「売店」は社会性が増加し問題行動も減少し，「アロマセラピー」は反応性が上昇したが問題行動も増加するという特徴があった。

3．問題行動を減少させるには，「売店」「音楽」が効果的であり，反応性を上げるには，「アロマセラピー」が効果的で，社会性を上げるには「売店」が効果的な傾向があった。

文　献

1）V．ヘンダーソン：湯槇ます，小玉和香津子訳，看護の基本となるもの，日本看護協会出版会，75，1999
2）吉田圭一：茅野宏明編，レクリエーション指導法（第2版），ミネヴァ書房，96，1999